シリーズ「聞く」も第10回を迎えました。今回は、NPOの現場で活躍されている方、市民活動を支援されている方にお話をお伺いしました。

トップを飾っていただいたのは、リニューアル号にふさわしい、いま最も活気のあるＮＰＯ法人「ブレーンヒューマニティー」の理事長である能島裕介さん。
役員もボランティアスタッフも大学生という学生主体のＮＰＯ法人を全国で初めて立ち上げ、「教えるとは希望を共に語ること」を信条に活動されています。

シリーズ listen to.... 聞く Vol.10

NPO法人 ブレーンヒューマニティー　理事長

能島（のじま） 裕介（ゆうすけ）さん

始まりは、学生4人の雑談から

――「ブレーンヒューマニティー」という名称に込められた思いとは？

ブレーン（頭脳）とヒューマニティー（人間性）をあえてひっつけたのは、「力」と「理想」というこの二つを融合し、社会の中で意味あるものにしたい、そう思ったからです。理想のない力は暴力になる。力のない理想は無力である。だから、あえてこの二つを対等におき、思いを実現できるような組織をつくりたいと。

――ボランティア活動への出発点は？

関学の一回生だった時、下宿に集まった4人で雑談しているうちに、自分たちで家庭教師のアルバイトの斡旋をやろうっていうことに。それが「ブレーンヒューマニティー」の前身となる「関学学習指導会」です。翌年の1月17日に阪神・淡路大震災がおきて、「僕たちに、何かできないだろうか？」その問い掛けが転機となりました。

原点は、阪神・淡路大震災

――阪神・淡路大震災を機に、どういう活動を？

被災した子どもたちが避難所で勉強している姿をテレビで見ましてね。「無償で家庭教師をやろう」と。ちょうど受験前の時期でもあったので。「被災した子どもたちに勉強を教えるボランティアを派遣しよう」の呼びかけに、二百人を超える学生が集まってきました。勉強をみてやることが、地震で家族を亡くし家を失った子どもたちとの交流の始まりであり、支援活動の原点なんです。人はどこかで互いにつながって生きている。そう感じましたね。そこから、キャンプに出かけたりハイキングしたりと、今の活動のベースが生まれていくのですが、子どもたちの笑顔が僕たちを動かす大きな力となったように思います。

子どもたちに多様な価値を

――全国初の学生主体によるＮＰＯ法人が誕生したきっかけは？

震災でかたちあるものは壊れてしまうという体験をした子どもたちには、画一的な価値観とは違った幸せのかたちがあると思う。子どもたちが多様な価値に触れることで、選択肢を広げる機会を提供したい。そんな思いと共に活動がどんどん拡大していって、下宿では対応できなくなってしまったんです。運営も現場でのボランティア活動も大学生が中心でしたが、プログラムを発案した学生自身がどんどんクオリティを高めていく。そこで、新たな挑戦として学生によるＮＰＯ法人「ブレーンヒューマニティー」を立ち上げました。

――現在、どのような活動を？

元になった家庭教師と補習の事業、そして被災児童支援事業とレクリエーション。それに、不登校の子どもたちの支援事業として訪問学習支援事業や不登校の子どもを持つ保護者「ポレポレ親の会」を発足させました。学校へ行かないという選択肢があってもいい。ハンディーキャップではない。それをぼくたちがサポートしようと。そのために、勉強を教えて力をつけてほしい。いずれかの段階で、自分で選択しないといけなくなる。その時に十分な学力がなければ、その選択肢は限られたものになる。そういう長期的な関わりを目指していきたいですね。思いだけで自分たちの活動を語るのではなく、客観的な意味づけとしての自己評価が求められていると思っています。

――「ブレーンヒューマニティー」が誕生して10年。何が変わって、何が変わらなかったか？

「学生が」という主語。これは変えてはいけない。それと、子どもたちにサービスを提供するということ。最終ゴールの地点は変わらない。でも、それ以外は変えていいと思う。同じ頂上を目指すのであれば、あえて崖っぷちを乗り越えるより、遠回りしてでも合理的で楽な道を選ぶほうがいい。

〈キャンプの様子〉

ブランド力のあるＮＰＯ

――ＮＰＯが根付いて自立していくには？

例えば、「赤い羽根の募金」は皆さんされる。社会的認知度があるからです。何に使われているかより、安心して寄付できるブランド力がものを言う。じゃあ、ブランド力のないＮＰＯはどうやって寄付を集めるか？そこが問われていく。マネージメントの問題は切実です。人材管理ひとつ取っても経費がかかります。サービスを提供するだけでなく、ブランド力を作っていく努力も必要だと。

――ＮＰＯとボランティアの関わり方は？

うちには今、四百人のボランティアがいますが、みんな対等ではないと思ってます。各々が主体的な関わりを持つ集まりであっても、ボランティアの壁ができる。それでいいと思います。自分の立ち位置を選べる。週に1回来る人と毎日来る人に、同じ事を求める必要もないでしょう。例えば常勤・イベントだけというふうに、ボランティアの区分割りをした方がいいと思う。

――今後のＮＰＯのあり方は？

「非営利組織」という名称に無理があるのかもしれません。最近話題になっている、「ソーシャルビジネス（社会事業）」や「ソーシャルベンチャー（社会起業）」という呼び方の方がしっくりくるのではないかと思います。

ルールとしくみづくりで次世代へ

――「ブレーンヒューマニティー」の今後は？

私たちは大学生が主体ですから、だいたい4年ですべてのメンバーが入れ替わります。そのため、いまの現役たちは、いうなれば第4世代ともいえるのではないかと思います。言葉で共有できても、体験を共有できていないから当然、温度差が出てきてしまう。僕は能島がいなくなっても、クオリティを維持してサービスをやっていけるようなルールとしくみの整理が大事だと思っています。思いだけではない要素、例えば判断基準・行動基準を明文化する。そうすることで、次世代に伝えていきやすくなればいいと思っています。

プロフィール

能島 裕介（のじま ゆうすけ）

1975年神戸生まれ。
関西学院大学（法学部）在学中に、関学学習指導会を設立。
卒業後、住友銀行に入行するが当会設立のため退職。
2007年4月からは西宮市市民交流センターのセンター長も兼務。

BrainHumanityの歩み

NPO法人 ブレーンヒューマニティー
西宮市甲風園1丁目3番12号 カミヤビル3階
http://www.brainhumanity.or.jp/index.htm

1994年	「関学学習指導会」創立
1995年	阪神・淡路大震災発生 被災した子どもたちを支援するため、訪問学習支援活動を展開
1998年	活動の安定的な継続のため「ちびっこ支援基金」創設
1999年	不登校の子どもたちへの訪問学習支援活動 HEP を開始 西宮市内に事務所を開設。NPO 法人化のため、関学学習指導会を改組し、ブレーンヒューマニティーを設立
2000年	学生主体としては全国初となる特定非営利活動法人の認証を得る 不登校の子どもたちの居場所として「フリースペース」を開設
2001年	海外ワークキャンプ事業、まつり企画運営事業など新規事業を展開